

シュンペーターの階級論

武 田 壮 司

目 次

はじめに

第一節 日本におけるシュンペーター研究

第二節 資本主義社会における階級の再生産

(1) 階級の再生産図式

(2) 企業者機能の特殊性

(3) 小括

第三節 資本主義移行期における階級論

おわりに

はじめに

1990 年前後より、シュンペーターの言葉は学界だけでなく一般社会においても注目されつつあり、‘イノベーション’という用語が紙上を賑わせ、民間の活力や構造改革がうたわれる様になった。この背景には、閉塞した経済社会を打ち破る創造的破壊への期待が盛り込まれているものと思われる。しかし、シュンペーターは創造的破壊を景気回復のために語ったのだろうか。彼の研究対象は歴史の中の資本主義であり、非常に長期的な視野からその本質を眺めたのである。また、その様な視点の中で創造的破壊を見直すとき、そこにある、破壊や創造といった言葉とは相容れない‘再生産’の概念にたどり着く。短期的には不変なものも、長期的に見れば激しい変動にさらされていると見たのがシュンペーターであるが、一方で、そうした変革はすばやく循環の中に吸収される。こうした思想が表れている 1 つの論文を紹介しよう。「企業者機能と労働者の利害」⁽¹⁾と題される論文で、シュンペーターは富者と貧者の格差は拡大傾向

にあるか縮小傾向にあるかと問い、それは過去から不変のままであると回答している。そして、その両者の格差は不当なものでなく、もし、大衆の生活水準を引き上げるために富者の取り分を減らそうとするなら、それは無益であるどころか、より貧しい暮らしを引き起こす要因ともなりうると指摘する。一方で、現在の資本家階級の構成員の 60～85% は、かつての労働者であるとも明言している。それぞれの階級の構成員は、不変でなく、長期的に見れば激しい交替が行われており、資本主義社会の上層にいるのは、選りすぐられた労働者であると主張する。これだけの叙述を見て、シュンペーターが資本主義に何ら問題がないと考えていた、もしくは階級格差は問題とされるべきでないと見ていたと判断することは誤りである。しかし、私が注目したのは、シュンペーターが、変化は非連続的な過程を通して進むと考えたが、その一方で、社会や歴史の不変性を主張している点である。マーシャルの‘自然は飛躍せず’の命題を否定し、発展は決して連続的でなく飛躍的に生じると主張しながら、一方で、歴史の断絶を否定し

連続性を強調している点である。ここには、非常に興味深い問題があるように思われる。そして、これを明らかにして、シュンペーターの理解のための新しい側面を浮かび上がらせることが本稿の目的である。

第一節 日本におけるシュンペーター研究

日本におけるシュンペーター研究は、中山伊知郎、東畑精一らによって行われた主要著書の翻訳をきっかけに、1950年代から大きく発展してきた。1950年に『経済学史』⁽²⁾、1952年に『十大経済学者』⁽³⁾、そして、1962年に『資本主義・社会主義・民主主義』⁽⁴⁾が中山、東畑の両氏によって翻訳されており、また、東畑は1955年～1962年にかけて『経済分析の歴史』⁽⁵⁾を訳している。一方、1956年には都留重人によって『帝国主義と社会階級』⁽⁶⁾と題されたシュンペーターの論文集が刊行され、1958年～1964年には吉田昇三が『景気循環論』⁽⁷⁾の監訳をしている。『理論経済学の本質と主要内容』⁽⁸⁾と『経済発展の理論』⁽⁹⁾は戦前に訳されていたので、1960年代の半ばでほぼ全てのシュンペーター作品が訳されたことになる。こうした活動が成果として現れるのは1970年代であった。1971年の大野忠男の『シュンペーター体系研究』⁽¹⁰⁾は、それまでシュンペーターの理論的側面が考察対象として中心に取り上げられてきたのに対して、その歴史的側面に注目し、全体系を論じたものである。

大野の研究は、シュンペーターの「社会階級論」が、『経済発展の理論』で彫刻された革新モデルの付随現象として描かれていると見ることから始まっている。企業者の革新遂行は、その新しいやり方によって企業者利潤を得る。それは、やがて模倣者の追随によって徐々に失われていく一時の利潤であるが、それでも、そこで

獲得される利潤は私的財産の形成を可能とし、家族とともにブルジョア階級への上昇を実現するものである。革新は、古い企業から生れるのではなく、新しい企業によって遂行されるのが常であり、こうした新企業の革新は、古い企業を排除して拡大していく。よって、ブルジョア階級の住民の中には、発展の過程で没落し、社会的地位を下降する者も現れる。企業者の機能は、個人的なものであり、家族はそうした能力とは無関係に地位を上昇し、その子孫は、財産は受け継いでも、その能力までも受け継ぐのではないからである。この社会階級の上昇と下降という交替現象が、同時に、これまでの支配階級によって維持されてきた社会的・文化的様式や諸制度をも変えていく。大野は、『景気循環論』の産業革命の叙述より、シュンペーターにおいて、交通、通信、商業や金融の諸組織の創設など社会的・制度的な枠組みの変化が経済的変革から要請されるものとして把握されている点を指摘する⁽¹¹⁾。つまり、大野によれば、シュンペーターは、制度的変化の要因を、商業・工業階級の社会的・政治的地位の上昇にもとめており、新しく上昇してきたその層が、その時代の関心や態度にも影響して、政策や文化を作り変えていくと言う、いわば資本主義の内部から生じるものと捉えている。こうした把握は、『資本主義・社会主義・民主主義』にもあり、古い貴族階級に代わってブルジョア階級が支配階級へと台頭することで、資本主義の発展は社会に合理主義の精神を植えつけ、近代数学や近代技術、芸術や生活様式、個人主義的民主主義、自由思想や社会立法と、近代文明の一切の特徴と業績が、その経済的成果とともに、直接間接に資本主義の産物として生成される。貴族とブルジョア階級の共棲の概念も、こうした理解を裏付けるものとなる。資本主義の長期的な変化過程を見るならば、支配階級の漸次的な階級の交替は、支配階級の内部を徐々に入れ替えてい

くことを意味する。それによって、歴史変化は、重層的なものとなり、資本主義社会にも中世社会の社会構造や権力分布、文化や‘精神’がもちこまれるのである。ゆえに、企業者の動機づけは、ブルジョア的合理主義の精神とは全く異なるものであり、利己主義とは別の、自身の帝国を築こうとする、創造的な活動を希求する中世的な個人的英雄志向に基づいている。企業者は、その超資本主義的な行動類型から活力を引き出しながら、新計画を合理的に計算し、快樂主義の障害となるような非合理的な努力に邁進する。こうして、シュンペーターの資本主義観は、創造的活動が経済活動に結び付けられている点でユニークな歴史的一過程となる。しかし、資本主義のますますの成功は、合理化を押し進め、貴族階級との共棲を解消し、経済における革新の組織化、ルーティン化を実現して行く。もはや、革新は計算可能なものとなり、企業者らの英雄志向が活躍する余地を狭めていくことで、資本主義は別のものに変形していくのである⁽¹²⁾。

この様に、大野はシュンペーターの歴史的側面が『発展理論』と『社会階級論』を布石として、革新モデルが産業過程の変化だけでなく、その付随現象として社会変化や歴史の体制変化までも取扱っていることを明らかにした。「今日の‘動学的・因果的’精密理論の水準から見ると、かれの理論がむしろ歴史的、社会学的色彩を帯びていることは、否みがたい事実である。そして、そういったかれの‘歴史的’動学モデルの性格がむしろの長所となったのであって、かくして初めて、単純な発展の原型モデルが、一方において純粹経済的＝非歴史的現象に妥当するとともに、他方において、より複雑な社会的、歴史的現象を解明する分析装置となることのできたのである。」⁽¹³⁾

その他、こうしたシュンペーターの歴史的側面に関する研究を、1983年に生誕100年を記念

してつくられた『別冊経済セミナー』⁽¹⁴⁾の「シュンペーター再発見」を通して確認しておこう。

塩野谷祐一⁽¹⁵⁾の「資本主義文明の衰退と社会主義」⁽¹⁶⁾は、シュンペーターの資本主義観に経済メカニズムと経済外的要素の対立や整合関係があることを見ている。シュンペーターの資本主義崩壊への分析は、資本主義の経済的メカニズムに欠陥を見るのではなく、そのメカニズムを動かす人間を、社会的・政治的・文化的関連の中に置き、そうした人間が経済的豊かさの中で変容していくことで、資本主義メカニズムを動かすのに不適格となり、故に、シュンペーターにとって資本主義は1つの包括的な文明であって、経済的な装置ではなく、利潤をめぐる個人的な天才が活躍する、冒険とロマンスにみちたブルジョア階級の社会であったと述べる。また、シュンペーターが文明を意識しながら、それらを比較することはできないと論じているところにも、一つの特徴を見ている。塩野谷によれば、『資本主義・社会主義・民主主義』における民主主義の取り扱いで、民主主義を価値理念ではなく単なる制度的方法とみなす点は、その表れである。民主主義政治が国民の意思を実現することは稀であり、もともと国民の意思といったものも政治家の操作によって作られたものであって、民主主義政治はこれを土台として、議員や大臣になりたい政治家の私欲にかられた票集めの活動にほかならない。塩野谷は、こうした民主主義論は、体制論の文脈では社会主義と民主主義との間の観念的な結びつきを切り離すことを意図したのであり、民主的社會主義の可能性を否定しないけれども独裁的社會主義の可能性を認める点、社会主義の経済的成功を認めながらも、非経済的には不確実性を主張する点に、シュンペーターの社会主義論の特徴を見ている。しかし、一方で、さまざまな非経済的要因の積み重ねによって規定された現実の資本主義から経済面だけを抽象して、そ

の経済的メカニズムの安定性や、盛大な活力を強調するシュンペーターの資本主義観に、強い価値評価が存在していることも指摘している。シュンペーターの評価としては、革新を思想的な中核に据えて、資本主義社会のあらゆる要素を再構成するという構想力の広がりや、経済と文明との関係性など、その社会分析の方法が重要であると述べている。

金指基の「共生の中の社会階級」⁽¹⁷⁾は、シュンペーターの階級論にある歴史の連続性という問題に焦点を当てている。金指によれば、シュンペーターの階級論は、資本主義過程の分析という視点から取り上げられたもので、社会階級を一般的な議論としてではなく、自己のテーマに合う限られた範囲の問題として扱っており、また、社会階級を一つの社会現象として、決して作り出すことのできない社会実体と認識していたといった点で、特徴があるとしている。そして、こうした社会階級論の関心は、階級がいかにして形成されるか、その本質は何であるか、階級間の関連はいかなるものかを問題としており、それは中世の貴族と資本主義の産業ブルジョアジーを、それぞれその盛衰においてとらえるという形でなされていると指摘する。大野の研究の際に確認した様に、シュンペーターの階級論は、社会的必要を満たす指導者が支配階級を形成し、その中身には、長期的には激しい交替現象がある。金指は、そうした流れを体制移行期において見ている。体制移行は、歴史の新しい時代の訪れとともに古い階級機能が無益なものとなることで生じる。新しい要求に適応できなければ、階級そのものが没落していくのである。しかし、この交替は漸次的に行われるのであり、金指は、このような階級のもつ機能と、それを遂行する能力を軸に展開される階級論が、シュンペーターの大きな特徴であると述べる。加えて、こうした階級的地位の交替過程には、例えば、貴族とブルジョアジーが共棲す

る時期があることになる。ここには、ひとつの時代に過去の時代が生き続け、それが次の時代を作り出すひとつの要因になるという、歴史過程に生起するさまざまな出来事を共棲の関係の中に捉えようとする視点が存在しており、これは歴史研究の先駆をなすものとして評価している。

こうした研究に加えて、近年では『シュンペーター』と題された2冊の書がある。岩波書店から、新書として1993年に伊東光晴と根井雅弘の共著で出されたもの⁽¹⁸⁾は、現在まで版を重ねており、2006年に根井雅弘が単独で講談社から出したもの⁽¹⁹⁾は、2001年度に単行本として出されたものを新たに新書の形で発行したものである。1993年に伊東光晴と根井雅弘との共著で出された『シュンペーター』は、共に1883年に誕生し、その後、イギリスの経済学界、経済思想の中で育ったケインズと、ドイツやオーストリアの経済学・思想の中で育ったシュンペーターとを比較する形で、シュンペーターの生涯、そして経済理論と帝国主義論を考察し、現代的なシュンペーター評価を下す内容になっている。先進国イギリスで育ち、自国の経済問題を解くことで大きな評価を得ていくケインズに対し、シュンペーターは、オーストリア帝国という中世的色合いの残る国で育ち、母国を愛しながらも、先進諸国に羨望の念を抱き、各国を渡り歩きながら、特定の国でなく資本主義そのものを見つめ続ける。その思想は、長期的な視野で資本主義の本質や運命を見抜かんとするものであった。賞賛されるケインズの思想も、このような視点を持つシュンペーターには、特定の国である時期に起きた問題を扱った、短期的で様々な制約をもったものに映る。しかし、人々はケインズを選ぶのである。本書の特徴は、こうした「理解されざる天才」という人間としてのシュンペーターに迫りながら、それと経済思想との関連を描き出したところにある。一

般教養の書としても位置づけることのできる本書が、20刷り以上を記録していることは、現代社会とシュンペーターとの接点を感じさせる⁽²⁰⁾。一方、2001年に根井が単独で刊行した『シュンペーター』では、シュンペーターのパラドクスというテーマでその生涯と理論とを考察していったものである。数々のパラドクスは、理論経済学者として認められんとしていたシュンペーターが、経済社会学者として評価されることになったというパラドクスの解明のもとに整理されたものとして読むことができる。本文中で指摘されるパラドクスは3つあり、第一が、資本主義の‘動態’的側面を強調しながら、他方で、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の‘秩序’を支持している態度である⁽²¹⁾。第二が、1919年に、大蔵大臣となったシュンペーターが、社会主義者でないにも関わらず、ドイツ社会化委員会からの誘いを受けて、ドイツ石炭産業の生産性を向上させて、それを公的制御の下に置くことを議論するという、社会主義の仕事をしていた点である⁽²²⁾。第三が、数理経済学としての能力が十分でなかったにも関わらず、数学の重要性を訴え、1930年には計量経済学界の設立に貢献し、10年後にはその会長に就任している点である⁽²³⁾。

それぞれのパラドクスに対して、根井自身は、明確な回答を与えていないが、しかし、それらは、その著書と生涯の両面から考察されており、故に、本書は生涯と理論的業績とを別々に論じるのではなく、同時に展開してゆき、全体を通してシュンペーターの成長を見ていくことが出来るものとなっている。例えば、第一のパラドクスは、シュンペーターの企業者概念が極めて少数の天才という個人的人間の要素を多く含むことや、アメリカ経済こそ企業者の‘理想郷’であると見ていながら、そんなアメリカの芸術・文化・政治システムには少しも感心を示さなかったことを明らかにしている⁽²⁴⁾。こうした展

開は、第一のパラドクスを解く鍵が、シュンペーターが資本主義社会（‘動態’）を、その制度やシステムなど‘秩序’から見るのではなく、その時代の企業者という個人的要素から見ている点にあると考えていることを暗に示しているものと理解できるだろう。また、第二のパラドクスは、シュンペーターの「帝国主義の社会学」と「租税国家の危機」と題された論文の検討へと繋がられ、一つのシステムの内部には、非純粋的なものが含まれているという‘混合性の原理’の主張や、政治の世界では、経済分野とは別の役割と仕組みがあり、そこには全く異なるメカニズムが働いていると見ていたことが明らかにされる。よって、第二のパラドクスは、シュンペーターの社会把握が、経済的側面だけでなく、その他の要素との関連性を見る複雑なものであり、自身の経済的立場とは矛盾する政治家としての活動は、この様な多面的な視点を示すものとして理解できる。続いて、第三のパラドクスでは、『景気循環論』における塩野谷の、統計を媒介として歴史と理論とを統合することを目指したという見解を紹介し、シュンペーターの意図が、経済学の最先端の分析用具を駆使して、資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析に切り込んでいこうとするものがあつたと見ている⁽²⁵⁾。すなわち、第三のパラドクスは、資本主義の歴史的要素をも、理論的に分析しようとするシュンペーターの意図から説明され、また、これが上述で示した理論家として認められることを望みながら、経済史家や経済社会学者として評価されるに至ったパラドクスに繋がっていく。このパラドクスに対する根井の結論は、シュンペーターの資本主義観にある複雑性は、単純なモデル化を許さない性質のものであり、それゆえに、現在のシュンペーター評価が定着していったと言うものであろう。そして、本書はこうしたパラドクスを解きながら、そこにシュンペーターの複雑な思考を浮き上がらせる

と同時に、そうした複雑性がシュンペーター自身にもあったという点を指摘するものである。根井は、その複雑性を世紀末ウィーンと絡めて示している。躍進するアメリカに立ちながら旧きウィーンを想うシュンペーターの心情を、‘表面上の陽気さと、内面の憂鬱’という、揺れ動く帝国の最後の日々と重ね、印象的に描き出している。こうした本書の展開は、誰も寄せ付けぬ強い個性によって認められることを望んだシュンペーターが、一方で、誰にも理解されることのない孤独を抱えながら輝いていたという、孤高の天才像をイメージさせるものである。

では、これらの研究から、本稿の課題である創造的破壊と歴史の連続性といった問題は如何にして説明されているだろうか。大野や塩野谷、金指らの研究からは、革新の非連続的な変化が、企業者を‘徐々に’支配階級へ押し上げ、それが歴史を連続的に変化させていると理解することができる。しかし、それでは、まだ没落（交替）せず、支配階級に留まっている古い住民らは何をしているのであろう。シュンペーターは、支配階級は、社会的な機能を果たすことでその地位を獲得するとしている⁽²⁶⁾。没落せずにそこに留まっている古い住民は、ただ没落を踏みとどまっているだけで、新しい企業者のみが、その社会的機能を単独で果たしているのだろうか。私は、シュンペーター階級論から、交替とは異質の‘再生産’を抜き出すことで、この問題を考察してゆきたい。

第二節 資本主義社会における階級の再生産

(1) 階級の再生産図式

本節から続く二節では、シュンペーターから再生産概念を抜き出し、その意義を見つけ出すことを目的とする。再生産の概念は、発展概念と密接に結びついており、そして、シュンペー

ターはこの発展を大きく2つの軸で展開している。第1が、資本主義の経済発展であり、企業者活動が慣行を覆すことで生じる景気変動である。第2が、体制移行である。一般的には、シュンペーターの体制移行の問題は、資本主義から社会主義への移行が分析対象とされている。しかし、シュンペーターの社会主義論は、文化的不確定性を主張し、社会主義の文化や支配体制など不明確の要素について述べることを避け、社会主義の経済成果の可能性を主題としたものである⁽²⁷⁾。これに対して、本稿が分析しようとするのは、体制移行と支配階級の関係であり、制約のある社会主義への体制移行よりも、封建主義から資本主義への体制移行を中心に扱うことにする。そして、分析の際には、この2つの発展を同じ土台の上で論じるために、企業者の階級移動という概念に注目した。その意味で、本稿の狙いは、階級論という下敷きを引くことで、シュンペーターの再生産概念を浮き上がらせることにある。

では、最初に第1の発展概念から見ていく。経済発展という枠内で階級の問題が関係するのは、企業者の社会的地位の上昇という命題である。企業者が革新の成功によって得る企業者利潤は、それが消滅していく傾向にありながらも、‘はるかに大きい’のであり、企業者は家族もろとも資本家階級へと社会的地位の上昇を果たす⁽²⁸⁾。先に紹介した‘資本家とは選りすぐりの労働者である’との言葉には、こうした企業者の資本家階級への参入を指している。この命題だけを見るならば、シュンペーターは、資本主義は誰にでも平等にチャンスを与える制度機能を持ち、労働者も能力があれば努力次第で階級を上昇可能であるように見ていたと感じられる。しかし、この能力が如何にして獲得されるのかについてのシュンペーター理論を見るならば、そうした理解が不適當であることに気づく。

『理論経済学の本質と主要内容』の下巻、第二

章「賃金理論」では、古典派理論が労働の供給と賃金とを、他の財貨と同様な価値原理で捉えているのに対して、現実的妥当性の点から批判がなされている。批判内容は、次の2点に整理でき、第1が労働の賃金の相違は、技能の相違から説明できるかどうか。第2が、労働の供給は、賃金の高低によって影響を受けるかどうかである。シュンペーターは、もしこの2点が正しいのであれば、労働所得と社会的地位との関係は、彼らの能力と労働の価値とから説明できることになり、価値原理は労働の賃金や供給だけでなく、社会的地位の構造まで規定しうることになると指摘している。それは、社会的ピラミッドの頂点に位置する者は最有能な者であり、逆に最底辺を構成する人々は、最も無能な人々であることを意味する⁽²⁹⁾。しかし、現実はずしもそうはなっていない。

この理論と現実の差を、シュンペーターは労働の特殊性に求める。労働に関しては、価値原理とは別の社会的強制力がより強く働いている。例えば、官職を目指す青年は、官職以外の職業をほとんど選択肢に入れることはなく、また大企業の役員は、仮により高い報酬を約束されていたとしても、賃金労働者を選択しない⁽³⁰⁾。それには、自身が生活してきた生活水準、社会的地位を維持したいと願う自身や家族⁽³¹⁾の心的態度、そして、引き上げるのが容易でない自己投資⁽³²⁾の問題が関係する。この様な‘経済的契機以外の要因’が絡んで、‘社会階級は、人々を鉄の鎖でつなぐ’のである。これは、人々が経済的欲求よりも社会的地位を優先するというだけを理由にしているのではない。その同じ強制力が同時に、社会的地位を上昇しようとする者にも働く。才能があるだけでは、決して地位の上昇に際して十分ではなく、他の一連の諸条件が満たされねばならないのである

「通常、企業者の地位、……につく可能性は世襲され、企業者の職能は多分に特別の適性を顧

慮することなしに充たされる。……その働きは価値あるものであり、企業者がそれに対して高い賃金を算定するとしても、それは不当ではない。しかし、彼がそれに適した労働者であると断じて主張することはできない。……彼以上に適した人々は、大抵彼と企業者の地位を争うことはできない。……普通の労働者が十中八、九その途をもたないのは確かであるが、しかし役員もまた同然なのである。まったく卓越した能力の持ち主のみが、……偶然な幸運に恵まれた場合にのみ、当初の志を貫き通す。企業者と競争しうるのは、ただ同一の社会的地位にある誰かある人に限られており、そこでのみ、日光の恵みが同等に配分されるのである。」⁽³³⁾

こうした社会的地位の上昇を阻む諸条件の中でも注目すべきものとして、技能取得の機会が挙げられる。シュンペーターは、社会的に価値のある職能はそれだけ高い報酬を得るものという原理は認めている。しかし、‘その価値ある職能に必要な能力’は、主に技能取得の機会があれば、‘普通の人によって’十分に獲得しうるのであり、その意味でいかなる高度な職能であっても、彼らが特別に才能豊かな者ではない。「いかなる種類のものであれ、技能を取得する者、あるいは‘高級の’職業につく者は、特にそれに適した人ではなくて、その機会を有する者であり、その機会はまだ主として、階級という契機によって特徴づけられる。」⁽³⁴⁾

もちろん、この伝達された技能の習得にかかる努力や投資などは、各々の個人の努力にあり、高級な職を世襲する者は、一般的には労働者を世襲する者に比較して多大な努力が要請される。主張しているのは、どの様な職の技能も、それを取得するのに特別な才能は必要なく、労働者の子供であれ、いざ機会を与えられれば、上役となれるのであり、本質的な能力差に基づくものでないということである。高級な職業に就く人が、必ずしもその職業の適任者であると

は限らないという意味は、階級がその職に必要な技能の取得の機会を不平等にしているという問題を指している。資本の有無だけではなく、技能の取得に関する、情報、心的態度、家族環境、教育環境などの不平等な配分が、人々の適性や生得の才能という芽を摘んでいる。ゆえに、ピラミッドの頂点を構成する人々は、仮に己の努力によってその能力を獲得したのであったとしても、彼は、自身の親やその階級の保護のもとで多数の競争から守られたのであり、場合によっては、そうした他者（社会）の力がより適任な者を排除した恩恵に預かっているかもしれないのである。

ところで、シュンペーターの「賃金理論」における主題は、古典派の賃金理論が限定された部分でのみ適用できることを示すことであった。この限定された部分とは、同一職業内、同一階級の内部である。この同種の集団の中では、技能と賃金、および労働供給とは、価値原理のもとに働くのである。ただし、その集団を離れては、この原理は全く無益なものとなる。

「国民経済の中に存在する最広義の労働者の個々の集団は、あたかも島々のように、相互に隔てられ、それらの間にはほとんど交流が見られない。……それぞれの島の上では価値原理が支配する。」⁽³⁵⁾ 言うなれば、島の住人は、島々の間の相違よりも同居している者同士の相違に目を光らせているのであり、常に隣人を抜きん出ようと隙を伺っている。彼らが協調するのは、逃亡者と侵入者を攻撃する時、そして他の島々を批判する時だけであり、またその様になることで島全体の秩序が保たれている。階級の壁は、その上昇の際にも下降の際にも立ちはだかり、そこに住む人々を逃さず永住させようとせしめる。これが、シュンペーターの階級の再生産図式である。

(2) 企業者機能の特殊性

階級の再生産図式は、企業者の社会的地位の上昇概念と、どういった関係にあるのか。ここでは、企業者の社会的地位が、如何なる契機から生じるのかを人的能力の観点から整理することで、極めて少数の人にのみ開かれたものであることを示す。

シュンペーターは、社会状況を大きく2つの要素の相互関係で捉えている。第1が、静態と呼ばれる概念で、革新もしくは発展のない社会、循環社会、定常社会である。ここでは、人々は慣行に基づき全ての経済活動を迅速に、合理的に行っているものであり、常に社会の均衡を求めて活動している。対して第2は、動態と呼ばれ、発展現象が生じる社会である。それぞれの経済主体が慣行に従って活動している秩序だった世界に、新商品、新生産方法、新輸送方法、新市場、新供給源の発見、新組織の確立など発展（革新）現象が持ち込まれる社会であり、革新企業は、これによって他企業に比べて低コストでの商品生産、および他企業にはない高品質商品の生産を実現させ、慣行を崩すことで定常社会を錯乱させる。この2つの要素の相互関係とは、発展による衝撃と、それを吸収する均衡化傾向である。企業者とは、この革新を遂行する経済主体であり、その際に生じる困難——行動指針がなくなることや、社会的抵抗に遭うこと⁽³⁶⁾——を克服する特別な能力を必要とする。シュンペーターは、能力概念を通常労働と技能労働とに分け、さらに技能労働を習得可能な技能と、習得不可能な生得の素質とに区別している⁽³⁷⁾。勿論、この技能と素質とは関連がある。しかし、注意を促したいのは、シュンペーターが習得できない素質と呼ばれる能力が存在すると述べている点である。このことを踏まえるなら、企業者の特別な能力は、‘習得できない素質’に分類されるだろうことが推測される。そうであれば、取得可能な「技能」と、生得の素質と

しての特別な「能力」を分けるのは、それがいかに高級な職能であったとしても、「技能」は、一度これを手に入れたのなら、後は「慣行」に従うだけの月並みなものとなる言うことである。例えば、いかに困難な学説であれ、それを一度獲得したならば、それが幾度も多数の異なる生徒の前で再利用できるように、やがて慣行に化ける。しかし、「能力」とは、企業者が革新を遂行するのに必要な前提条件であり、しばしば慣行化し、安定した「技能」を無力にさえる。この力は、資本家階級であっても、簡単に労働者階級の慣行を覆すことができないのと同じ様に、階級によっては与えられない特別な「能力」として認識される。そして、こうした能力概念を見れば、シュンペーターの企業者の無階級的輩出の命題——企業者は、労働者、貴族、神学・法学・医学関係者、小作人、農場経営者とあらゆる階級からでてくる⁽³⁸⁾——も理解することができる。労働者が工場現場でより効率的な作業組織を確立することも、大企業の役員が顧客の新需要を探り当てることも、共に困難であり、これを克服する「能力」は、資格を取得するようには獲得し得ない。何が有効であるかが不明であるが故に、それは階級的に提供しうる「技能」取得の機会、すなわち、他の階級よりも効率的にその技術を提供する機能を無効にする。故に、企業者は階級や集団を選ばず登場してくるのである。企業者は革新成功の暁に社会的地位を上昇すると説明されるが、先に確認した、鉄の鎖や海洋に隔てられた島々といった固定的な階級観を思い出せば、無階級性を平等性と結びつける理解は不適當であることが分かる。人々の志向それ自体が階級的に制約され、努力の矛先が、その階級内部に留まるように仕向けられるからである。シュンペーターが見た資本主義の社会的地位上昇の機会とは、階級的には平等であるが、しかし、全ての人に与えられているものではなく、きわめて少数にのみそ

の可能性が与えられているに過ぎない⁽³⁹⁾。不平等性は温存されるのである⁽⁴⁰⁾。

(3) 小括

これまでに確認した不平等性をより詳しく見るならば、企業者の社会的地位の上昇とは、支配階級が自身の階級的地位を強固にするために優秀な人材を吸収している過程であることが分かる。封建時代においても支配階級として君臨した貴族階級（騎士階級）は、有能な騎士を吸収することで、その階級的地位を維持していたのである。「重要なことは、決定し、指令し、指導し、勝利を取めるという点にあった。騎士たちは、この種のことをやりえたし、また進んで行く意志があった。そして、後の時代の上層貴族はかれらの中からこそ生れ出たのであって、……騎士の中でも上層階級に昇進したかれらが、騎士階級全体の地位を維持しかつ高めたのである。」⁽⁴¹⁾

上層階級の社会的地位は、有能な人材を受け入れることで保たれている。ゆえに、彼らのために社会制度を整備し、種を撒き、収穫することに励む。このことは、資本主義時代においても当てはまり、その時代の支配階級であるブルジョア階級も、また、企業者の働きによってその高い地位を獲得している。ブルジョア階級は、成功するか失敗するか判断不可能な、また、強い抵抗も予想される新しい市場に入っていくことをためらう。数少ない勇敢に新しい局面に挑戦していく事業家の実績をみて、現実性と安全性を見極めた上で、それを取り込もうとする。その意味で、企業者以外のブルジョア階級は、先例にならうことしかできない。

「新しい市場を開拓することはすべて、危険をはらみ、試行錯誤を伴い、抵抗に打ちかつ必要を意味する。……事業家階級の構成員の大部分はこの点で欠けるところがある。かれらは、だれか他のひとがすでに新機軸を実行して成功

をおさめてはじめて、その先例にならうことし
かできない。』⁽⁴²⁾ しかし、この‘先例にならうこ
と’がブルジョア階級の生命力の強さの一つの
表れとなっている。こうした新しい方法を習得
する機会、階級的な制約のもとでブルジョア
階級に有利に働くからである。すなわち、企業
者の社会的地位の上昇とは、それ自体が上層階
級のために利用されているのであり、それによ
って再生産構造が揺るぐことはないのである。

ただし、シュンペーターは、資本主義社会の
こうした不平等性を視野に入れていながら、同
時にこの不平等性が、被支配層を一方的に締め
付けるだけではない別の作用をも見ていた。勇
気をもってイノベーションに成功した事業家に
は、彼が、その突出した高い水準を保つことが
出来る間、特別の利潤を確保することができる。
これはその事業家にのみ与えられる特権であ
る。しかし、高い水準が一般化するにつれて価
格が下がり、特別利潤は消滅する。ところが、
この特別利潤の消滅過程は、一方で一般大衆へ
の革新の還元過程である。資本主義は、少数の
有能者に特別な任務を遂行させ、彼らに十分な
報酬を与えた後に、それを一般大衆へも引き渡
すのである。

「新しいことを成功裡に成し遂げた人には、
さしあたり、彼の成功が公然のものになるまで
は競争者がいない。その後、たしかに競争が始
まり、利潤は消失していくが、そこにいきつく
までの時間は通例巨額の利潤をあげるに十分な
ほどは長い。この機構はきわめて巧妙である。
というのは、それはまったく同一の原理にもと
づいて、そのような任務に国民の最高の頭脳を
集中して全精力を傾注させるに十分な大きさの
報奨金を与えると同時に、……報奨金を取り除
かれていく過程は、とりもなおさず、革新の成
果が価格下落という形で一般大衆に還元されて
いく過程である。』⁽⁴³⁾ すなわち、上層階級の地

位を強固にする企業者の働きそのものが、一方
では、一般大衆にも還元され、それによって階
級間の格差は縮まらずとも、生活水準は全般的
に向上するのである。

第三節 資本主義移行期における階級論

本節では、資本主義移行期の貴族階級に注目
し、体制移行における再生産概念を確認してい
く。その際、貴族のみが支配階級として君臨し
ていた封建主義時代、そして貴族階級とブル
ジョア階級とが共棲していた16～18世紀の絶
対主義時代、それから産業資本主義時代という
順序でこれを述べていきたい。

まずシュンペーターの階級論の特徴は、階級
のもつ機能を重視する点にある。階級機能と
は、その社会において必要とされる役割を果た
すことであり、この必要の重要度と、その成功
の度合いが階級としての社会的地位を決定す
る⁽⁴⁴⁾。封建時代の上層階級の地位に貴族が就い
たのは、この時代では、戦争が正常なことであ
り、生きのこるために不可欠な要素であった為
である。貴族階級は、専門家として唯一、戦争
のための不断の武術の鍛錬が可能な存在であっ
たし、また知行制度によって馬や武器などの生
産手段を与えられており、戦争における諸機能
や適性を備えていた。加えて、いったん戦争で
勝利したならば、辺境地域を植民地化して富を
獲得することができた⁽⁴⁵⁾。こうした、社会の必
要を満たす機能を独占的に持っていることが、
貴族階級を上層階級へと押し上げているのであ
る。ゆえに、封建時代における貴族各々の社会
的地位の確保や喪失は、この貴族の階級機能へ
の貢献度でもってはかられる⁽⁴⁶⁾。貴族の階級機
能を強化する要素を持つ者であれば、農民階級
の者であれ、誰でも上層階級へと昇ることが可
能であった⁽⁴⁷⁾。

ところが、貴族に社会的地位を与えた要因で

ある、戦争機能の重要度が社会的に低下していくことによって、貴族階級は衰退していく⁽⁴⁸⁾。しかし、その一方で、別の分野には新しい可能性が開かれていくのである。封建社会の中で育ち自らの機能を社会的必要性に結びつけ、徐々に力をつけていった都市のブルジョアジーである⁽⁴⁹⁾。この新しい支配階級は、自身の社会的重要度を高めながら、戦争機能の発揮の場が制約されていくことで上層階級への参入の機会を失っていった新参者や、それまで階級的に排除されていた有能な人材を吸収していくことで成長していく⁽⁵⁰⁾、ついには、王や軍隊、教会および官僚らも、経済的にブルジョア階級へ依存せざるを得なくなるまでに勢力を拡大させていく。貴族階級は、法律を整備し、軍を派遣し、政策を立案することで、制度的にブルジョアジーの発展を促し、一方でブルジョアジーは、経済的に貴族階級を支援する⁽⁵¹⁾。「それは二つの社会階級の積極的な共棲であった。その一つは、疑いもなく経済的に他のものをささえたが、その代わり他のものによって政治的にささえられていた。」⁽⁵²⁾

この貴族階級とブルジョアジーとの相互関係は16～18世紀の間まで続き、互いに積極的に支えあう。ところが、こうした共棲の成功が資本主義の発展を促進し、荘園や村落、職人ギルドの破壊へと繋がる。ブルジョアジーは、貴族階級の生活の土台を切り崩すまでに発展すると、やがて共棲を解消するに至る。ここで重要なのは、貴族階級という“階級そのもの”は資本主義の生起、発展とともにその中世的な土台を喪失し、消滅していくが、しかし、貴族階級を出自とする人々の全てが没落するわけではないことである。旧貴族階級は中世や絶対主義の時代が過去のものとなり、ブルジョアの時代が本格的に動き出すと、その時代の変化に合わせ自らの経済的立脚点をブルジョア的なものに置き換え、新しい時代に新しく適応することに

よって自らの支配階級としての強固さを保全していくのである。「貴族的要素は、無束縛にして澆刺たる資本主義時代(競争的資本主義時代)の終わりにいたるまで社会の主人たる地位を保ちつづけた。疑いもなくこの要素は不断に他の階層から優秀な頭脳を吸収し、これを政治へおくり込んだ。……その階級的位置は、自らを生き育てた社会的、技術的条件が失われてもなお生き延び、そしてまったく異なった社会的、経済的諸条件に対しても、自らの階級機能を変形せしめることによって適応しうることを示してきた。貴族や騎士は、なんらの抵抗もうけず、しかもまったく易々として……、行政官、外交官、政治家に、あるいは中世の騎士とはなんの関係もない型の仕官に、変質していった。」⁽⁵³⁾ 貴族階級の構成員は、階級機能の消失と共に滅びるものがある一方、階級機能を変形させていくことで、上層階級に留まる者も存在する。商才のあったものは、貴族階級からブルジョア階級へと水平移動していった可能性も考えられるのである。

おわりに

以上で、シュンペーターの再生産概念について検討を終わった。シュンペーターには、企業者の社会的地位の上昇という再生産とは相容れない概念があるが、こうした企業者の働きすらも、上層階級の地位を強固にするために利用されるのであり、上層階級は様々な手段でもって、己の地位を維持する。また、体制移行の問題においては、支配階級は、歴史的な状況への適性、階級機能との関係によってその地位を得る。階級的位置は、その時代における必要性から、一般的大衆をも含めて彼らからその階級機能を求めて受け入れられるのである。ただし、いったん、その地位についた支配層は、その地位を維持するために新しい支配層が出現した際にも、

自身の機能を変形せしめ、時代変化に適応していく。上層階級は、体制変換の後も、外見的には減びたように見え、実はその地位を維持し続けるのである。こうした働きが、創造的破壊と歴史の連続性とを補完し、さらに大衆へ革新の果実を配分させることに貢献している。

では、こうした視点は、何を意味するのであろうか。第一に、シュンペーターの歴史観があげられる。シュンペーターは、あらゆる民族や王国も、発生、発展、衰退という過程をたどるといふ歴史を貫徹する歴史理論⁽⁵⁴⁾を見ていた。封建主義から資本主義への移行の問題にも、こうした歴史観を見ることができる。封建主義の時代においても、資本主義の時代においても、創造的破壊のメカニズムは存在するのであり、このサイクルは資本主義の専売特許としては描かれていない。資本主義は、それが銀行の信用創造を利用した企業家による、経済分野での革新と、その付随現象として景気循環を生成する点において特徴をもつだけである。封建主義において、その舞台は戦争であり、そこでは騎士のサイクルが存在する。内的発展運動は、常に動いているのであり、それぞれの時代で繰り広げられる舞台は、非連続的な発展があることによって、徐々に開拓される。すなわち、シュンペーターは、時代を超えた歴史を貫徹する1つの大きな史的サイクルをイメージしているのである。第二に、その思想をあげることができる。シュンペーターは、しばしば政策論を好まなかったと言われており、代表作『景気循環論』が当時、十分な評価を得られなかった理由の1つをそこに求める意見もある。だが、彼は政策論を無益と考えていたのではない。政策を主張する前に、その問題を正しく理解する必要があると主張していたのである。しかし、これは正しい理解が正しい政策を生むということだけを指しているのではない。『理論経済学の本質と主要内容』は、次の文章から始まっている。「『す

べてを理解するとはすべてをゆるすことである』という格言には、もっともな意味がある。一層適切にはなお次のように言うことができよう。すべてを理解する人には、ゆるすべきものは何もない、ということが分かる、と。』⁽⁵⁵⁾

シュンペーターは、‘理解する’という言葉がもつ秘めた力を感じていたのである。何も語らずとも、問題となっている対象を正しく理解したならば、それだけで多くの問題が解決されたと考えていた。多くの論争は、互いの不理解や無知によって生じるものと見ていたのであり、それぞれの差異ではなく共通点を見つめることに価値を見出していた⁽⁵⁶⁾。シュモラーとメンガーの方法論争⁽⁵⁷⁾への態度―歴史と理論は、対立するものでなく、互いに貢献しあうものである―は、それをよく表している。ワルラス、マルクス、マーシャルと、を批判的に摂取し、自身の中で共存させることを目指し、また社会事象は一つの統一的現象であることを強調し、経済社会学として制度や集団心理などの分野をも経済的に把握しようと努めていた。「われわれは真摯に、各々の理論を理解することに努めよう。……それがなされるならば、たいていの場合、事態は論理的には異論の余地のないことが明らかになり、激しい論争の多くはおのずから解消するであろう。克服をでなく理解を、批判をではなく習得を、単なる是認もしくは否認をではなく、分析と各命題における正しいものの抽出とを、われわれは望むものである。』⁽⁵⁸⁾

激しい交替の存在や、そのメカニズムについて述べる一方で、支配層と被支配層の構図は容易に転覆しないものとされている。少数の有能者だけが、それを打ち壊しうるが、その影響への反応速度は平等ではない。その意味で、創造的破壊は、全てを打ち壊したのではない。‘如何なる制度も、その時代を生きた’⁽⁵⁹⁾のであり、過去の時代を生きた支配集団―この支配層は、交代を繰り返しながら、社会的な必要を満

たすことによって君臨する。一が、革新に覆いかぶさることで、歴史は決して断絶しない。‘後人の労作は先人の労作から有機的に発展する’ことを強く主張していたシュンペーターにとって、革新とは、過去と未来、他分野や他産業とを接続しているのである。勿論、こうした思想は、自身の理論では摂取し難い要素（戦争や貧困などが挙げられる）を退け、また長期的な視野は、しばしば資本主義の経済システムとしての特徴を見る上で、十分な成果をあげることができなかった。加えて、こうした洞察は、支配階級に位置する者の視点から描かれていることにも注意しなければならない。シュンペーターの過ごした世紀末ウィーンは、近代的要素と封建的要素とが‘重層’している時代であった。そして、メンガーを始め、シュンペーターの師であるヴィーザーやバヴェルクも、官僚経済学者として支配階級に位置していたのである。八木紀一郎は、シュンペーターの体制移行に関する問題から次の様に述べている。「現在の私たちも、体制の問題をかかえている。しかし、私たちは、問題は使い古された言葉ではなく、それが現実の諸個人にとって、彼、彼女たちの共同生活にとって何を意味するかだ、という世界のあちこちであがる声にも、共感を覚えざるをえない。この‘何’を言いあてるイマジネーションを欠いたまま体制の問題に取り組むかぎり、それは既存の命題を修正することはできても、それに代わることでできない議論を生み出すだけである。中欧の社会科学者のこの最良の世代の代表的人物が私たちに伝えようとしたものが、こうしたアイロニカルな知恵に終わったということは、私には痛ましいことのように思える。」⁽⁶⁰⁾ この体制移行に個人々人は何を求めるかという視点は、地に足をつけたものとして訴えるものを持っている。企業者という少数の天才を軸に据えたシュンペーターの経済学では、労働者はそれ独自の役割を担うものとして積極的

に描かれていない。シュンペーターが労働者へ言及したものは非常に少なく、本稿の冒頭で紹介した論文は、その意味で珍しい一稿である。八木が指摘した‘個々の市民’という点においても同じである。注目されているのは支配階級の存在であった。よって、八木の視点は、シュンペーターの経済学を再解釈する上でも、非常に重要なものであるだろう。しかし、これらが全く考慮されていないわけではない。本稿が明らかにした旧勢力の一部は時代が変わっても生存可能であるという結論は、視点を変えれば、個々の市民が変革にあたっても旧時代を100%捨て切れなかった、と捉えることも可能である。

しかし、それでも私たちはシュンペーターから1つの有益な、時代を見る目を学ぶことができる。シュンペーターの生きた時代は、バルカン戦争から始まり、第一次世界大戦に続き、母国オーストリア帝国の滅亡、イギリスの凋落とアメリカの躍進、世界恐慌にナチズムや社会主義の台頭、そして第二次世界大戦が荒れ狂った時代であった。経済的には、自動車や電気など次々と新技術が生み出されており、激動の時代であった。こうした時間の中で、変化の要因を主に対象としつつ同時に、常に変わらない、不変なものを見つめることが、シュンペーター理論に深みと奥行きを与えている。近年は、不確実の時代と呼ばれ、次々と新しい産業が創出し、これまでにない新たな課題が提出されている。しかし、こうした変化だけに目を奪われるのではなく、一方で、長期的な相互関係の視野を持って見ることの重要性を、シュンペーターは教えてくれるのである。

最後に、本稿の扱う問題について、残された課題を確認しておきたい。八木は、シュンペーターの‘過程’という概念に注目し、そこに大きく3つのレベルの‘過程’が存在していることを指摘している。『景気循環論』の序文で、「景気循環を分析することは、資本主義時代の経済過

程を分析すること以上を意味しもしなければ、それ以下を意味しもしない。』⁽⁶¹⁾ とある様に、‘過程’とは、シュンペーターの資本主義分析の一つの大きなテーマである。八木によれば、過程の第一は、革新の遂行が信用創造と絡み、従来の均衡から次の均衡へと接近するといった、企業者という個別の経済主体と、他のそれぞれの経済主体との行為を連鎖関係でとらえるひとまとまりの個別的な過程。第二は、企業者だけでなく、その他の諸主体の経済行為との相互作用の中で生じる、好況や不況、競争と淘汰といった経済社会全体の総過程。第三は、景気循環の個々のサイクルをこえた変化を示す大きな経済的・社会的過程であり、企業者精神の衰退、資本主義擁護者の消滅、私有財産の実質の消失などの事態がこれに関わる。この3つの過程は、互いに異質のものではなく、第一の個別的過程を説明する原理が、第二の総過程をも説明するのであり、そこから引き出される巨視的な歴史考察が第三の大きな過程となる⁽⁶²⁾。もう少し碎けた言い方をするならば、八木の指摘した3つの過程とは、それぞれ均衡から均衡、構造から構造、体制から体制をあらわすものとして把握できるだろう。そうであるならば、本稿が明らかにしたものは、このうち第三の体制から体制までの過程についてであり、創造的破壊と歴史の連続性を解明する上では、他の過程の考察と合わせて、シュンペーターの資本主義過程という視点からも検討する必要があるだろう。

注

- (1) シュンペーター、八木紀一郎編訳『資本主義は生きのびるか』（名古屋大学出版社、2001年）第三章「企業家の機能と労働者の利害」を参照。
- (2) シュンペーター、中山伊知郎、東畑精一訳『経済学史』（岩波文庫、1980年）
- (3) シュンペーター、中山伊知郎、東畑精一訳『十大経済学者』（日本評論社、1952年）
- (4) シュンペーター、中山伊知郎、東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』（東洋経済新報社、1995年）
- (5) シュンペーター、東畑精一訳『経済分析の歴史』（岩波書店、1955-1962年）
- (6) シュンペーター、都留重人訳『帝国主義と社会階級』（岩波書店、1956年）
- (7) シュンペーター、吉田昇三監修、金融経済研究所訳、『景気循環論』（有斐閣、1958-1962年）
- (8) シュンペーター、大野忠男、木村健康、安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』（岩波文庫、1984年）
- (9) シュンペーター、塩野谷祐一、中山伊知郎、東畑精一訳『経済発展の理論』（岩波文庫、1977年）
- (10) 大野忠男『シュンペーター体系研究』（創文社、1971年）本書は、日本の学界にシュンペーターの社会科学的側面を紹介した書として知られている。また、1971年度の‘日経経済図書文化賞’を受賞した。
- (11) 「イギリスの社会と文明とに全く新しい相貌を与えたこの変革は、……企業者革新を始発点とする経済発展から起動し……製造業も農業も新しいやり方で再編成され、家内工業の職人や小農民は圧倒された。囲い込み運動（農業上の革新）……の完了は、農民の伝統、価値、生活習慣を破壊した。古い社会の階層の没落、新しい階級の上昇、それに伴う価値体系の変革等、長期にわたる再編成と再調整の過程を必要とする社会的変化がそこにみられるのである。」大野忠男、同上書、pp. 97-102 参照。
- (12) 大野忠男、同上書、pp. 103-105 参照。
- (13) 大野忠男、同上書、pp. 417-418。
- (14) 『別冊経済セミナー「シュンペーター再発見」生誕100年記念』（日本評論社、1983年）
- (15) 塩野谷のシュンペーター研究書としては、『シュンペーター的思考』（東洋経済新報社、1995年）がある。本書は、シュンペーターにある特別な思考方法を抜き出し、それを社会的共通財産として使えるものにすることを目指したものであるが、シュンペーター研究としては、特にシュンペーターの『経済分析の歴史』の構成上の時期区分が、『景気循環論』の3つのコンドラチェフの時期と類似していることを指摘し、彼が社会の発展と経済学との発展との関係、すなわち、経済領域と他領域との相互関係をも見ており、相互に関係しあいながら発展する進化的経済

- 学を見ていたとしていることは、注目にあたいる。
- (16) 塩野谷祐一「資本主義文明の衰退と社会科学」, 同上書, 所収。
- (17) 金指基「共生の中の社会階級」, 同上書, 所収。
- (18) 伊東光晴, 根井雅弘『シュンペーター』(岩波新書, 1993年)
- (19) 根井雅弘『シュンペーター』(講談社, 2006年)
- (20) こうした現代社会とシュンペーターとの接点について考察した研究として, 井上義朗を挙げることができる。井上は, 1980年前後から唱えられてきた‘市場の復権’で人々が描いているのは, 新古典派の市場経済ではなく, 市場の内生的運動エネルギーに期待するシュンペーターの市場経済であると主張している。井上義朗「導体的市場経済の思想」, 高哲男編集『自由と秩序の経済思想史』(名古屋大学出版社, 2002年) 所収。
- (21) 根井雅弘, 前掲書『シュンペーター』p. 46 参照。
- (22) 根井雅弘, 同上書, pp. 72-73 参照。
- (23) 根井雅弘, 同上書, p. 110, p. 143 参照。
- (24) 根井雅弘, 同上書, p. 46 参照。
- (25) 根井雅弘, 同上書, p. 152 参照。
- (26) 「どの階級も, 一定の機能をもっていて, それをその理念および立脚点にしたがって遂行しなければならず, 事実においても階級全体として, ないしはその構成員の階級的行動をととしてその機能を果たすのである。そして更に, 国民全体の社会的構造の中で, それぞれの階級の地位は, 一方においてはそのような機能に課せられた重要性によって, 他方においてはその階級がこの機能を遂行する際の成功の度合いによって, きまってくる。」シュンペーター, 前掲書, 『帝国主義と社会階級』p. 218。
- (27) シュンペーターの社会主義論は, 『資本主義・社会主義・民主主義』にて詳細に述べられている。本書は, 5つの中心的テーマを軸に社会主義を述べたものであり, 第一は, マルクス学説の検討である。第二は, 資本主義から社会主義への移行の分析である。ここでは, 資本主義システムが自身の持つ欠陥や矛盾によって滅ぶのではなく, そのシステムの成功が, 資本主義制度の枠組みを変容させていくという議論が展開される。そして, 第三では, 社会主義の経済的な成功可能性と, その条件が考察される。‘文化的的不確定性’の問題が述べられるのは, このテーマにおいてであるが, シュンペーターは, 社会主義の

成功可能性を述べる際, それが経済的に成立しうることを示す以外のことは, 何ら述べられないと主張している。例え, それが歴史的現実から推論されたものであろうと, そこに‘無数の可能性の独断的な排除’が存在している可能性を否定できないのであり, また, 現在の, およびシュンペーターの定義の下では, あらゆる文化的性質が成り立ちうるからである。「他の多くの定義と同様に, われわれの定義に従えば, 1つの社会は十分に, かつまた真に社会主義的でありながら, 同時に絶対的支配者によって統御されることもできれば, ありとあらゆるもっとも民主的な仕方でも組織されることもできる。それは貴族的であることもできれば, プロレタリア的であることもできる。……好戦的または国家主義的であることもできれば, 平和的または国際主義的であることもできる。平等主義的であることもできれば, その反対であることもできる。……個人主義的であることもできれば, 画一的であることもできる。……社会主義は実際には文化的プロテウスであること, そしてその文化的可能性をいっそう明確にするためには, 人は社会主義という類概念のなんらかの特殊な場合について語ることに甘んじなければならぬ……。」シュンペーター, 前掲書『資本主義・社会主義・民主主義』pp. 267-270 勿論, この経済的側面の分析においても, それだけでは社会主義を論じきったことにはならない。仮に社会主義が経済的成果の面で資本主義よりも劣ることが分かっても, それは社会主義が資本主義よりも劣っていることを示すのではないからである。同書, p. 266 を参照。

ところで, シュンペーターの社会主義論は, こうして多くの不確定性をもつものであり, ‘体制移行と支配階級’の關係に注目する本稿の目的には, 適さない。よって, このテーマの検討は他の機会にゆずりたい。尚, 本書の第四のテーマは, 民主主義の性質についての分析であり, 第五は, 社会主義政党の歴史的概観である。

(28) 「企業者そのものは……成功の場合にはかれらおよびその子孫は, 資本家階級に昇進する。」シュンペーター, 前掲書『景気循環論』一卷, p. 151。

(29) シュンペーター, 前掲書『理論経済学の本質と主要内容』下巻, p. 47 参照。

(30) 「各大企業にはいずれも, 普通‘役員’と呼ばれるカテゴリーの労働者を有する。彼らの‘俸給’は労働

者の‘賃金’といかなる関係にあるか。疑問の点は、労働者とは異なる社会階級に属するこういった役員が、たとえよりよい報酬が得られるにしても、決して‘労働者’とはならないであろう、ということである。……彼らの職業教育は、もはや引き上げることを得ない‘投下資本’であるばかりか、すでにそもそもの初めから彼らは、……役員の途を進むべく社会的に強制されていたのである」、『われわれの郷国では、年々歳々、官職を志す青年たちはみんな、官職以外の職業の可能性については殆どこれを考慮にいけないのである。……彼らは、待ちうけている報酬が最大どころか、おそらく最小であり、需要が明らかに超過する箇所に、彼らの労働力を供給するのである。彼らには事実上、自己の国の、また自己の階級の子として、まったく選択の自由はない」シュンペーター、同上書、下巻、pp. 69-70 これらの事例は、高学歴者が、職があるにも関わらず、単純労働者になりたがらずにフリーターなどになって別の機会を採す様子を観察すれば根拠のあるものと思われる。この時に、彼らを単純労働から遠ざけているのは、低賃金ではない別の心的態度であろう。

- (31) 「軍人は一般に、その職業を変えるならば、非常に手痛い社会的な‘公民権剥奪’を蒙らざるを得ない。さらにこれらの職業においては、国民的、政治的境界の方が、移住禁止令による場合よりも遥かに厳しく作用する。……自己の社会的関係にあっては、これらの人々は無援の状態にあり、従来の社会的水準を維持することを得ない。」シュンペーター、同上書、下巻、p. 71 高い社会的地位にある親は、子供にも同等以上の社会的地位の職に就くことを望むのであり、これを損なうのであれば、それによって自身の社会的地位もが汚されたと感じる。こうした感情は、その家に生まれた子供への圧力となるのであり、自由選択は著しく制約される。
- (32) 「したがって、ひとたび費やされた費用は、もはや回収しえないから、土地に似た状態を呈する。すなわち、供給の変化によって価格に影響を与えることができず、獲得しうるものを手に入れる外はない。そして、すべて‘好み’から獲得された熟練もまた、こうした性格を持つ。」シュンペーター、同上書、下巻、p. 90。
- (33) シュンペーター、同上書、下巻、pp. 73-74。
- (34) シュンペーター、同上書、下巻、p. 76。

(35) シュンペーター、同上書、下巻、p. 77。

(36) ここで挙げられている困難とは、まずこれまでの経験が役立たなくなることから、自身の洞察や計画によってそれを克服する必要性が生じること。そして、新しいことに対する不安に打ち克つ意志力である。社会的抵抗とは、新しいことを実行する際の協力を得ることの困難さ、そして同業者らの邪魔や抵抗、最後に消費者を惹きつける困難さという抵抗である。これらを克服すること、この能力こそが企業者機能を遂行する力となる。シュンペーター、前掲書『経済発展の理論』上巻、p. 222 参照。

(37) 「簡潔を期するためわれわれは、今日ふつうに設けられる細かい差異には立ち入ることなく、単に‘通常’労働と‘技能’労働とを区別し、さらに後者を、その技能が主として能力習得に基づくものと、主として高級な生得的素質に基づくものとに区別しよう。」シュンペーター、前掲書『理論経済学の本質と主要内容、下巻』p. 66。

(38) シュンペーター、前掲書『景気循環論』一卷、p. 151 参照。

(39) 何故、少数であるのかという理由について、これまで生得的‘能力’として説明してきたが、より厳密には、その様な‘能力’獲得に必要なものとして次のような才能の必要性が説明されている。「第一に挙げるべき点は、特異な肉体的・精神的精力である。……産業指導者たちは、しばしば非常にムリな日常業務の重荷を負担しなければならず、一日のうちの大部分の時間をそのために捧げなければならない。……ひとによってそのさいの疲労の度合いに差があり、この差がその個人の成功の度合いに大きく影響する。そればかりでなく、新しい可能性をひらくような仕事は……、夕方おそく深夜にまで及ぶのが普通であり、そのさい最後まで精力や着想力を完全にもちつづけることのできる人はごく少ない。……そしてこの点のちがいが、次の日には一そう大きなちがいとなってあらわれる。」シュンペーター、前掲書『帝国主義と社会階級』p. 196。

(40) 「きわめて例外的なばあい……でないかぎり、或る個人が一足跳びに‘上’の階級にはね上がるようなことはありえない。……或る特定の個人が自分の力で上級階級に昇進するというようなことは、実際上不可能であるのが普通であり、また階級を構成する単位としての個人が、その一生のあいだにみずから

- の階級的地位を決定的に変化させるというようなことは、ほとんどありえない。」シュンペーター、同上書、p. 201。
- (41) シュンペーター、同上書、p. 226。
- (42) シュンペーター、同上書、p. 195。
- (43) シュンペーター、前掲書『資本主義は生きのびるか』p. 102。
- (44) 「階級はどの階級も、一定の機能をもっていて、……階級全体として、……その機能をはたすのである。そして更に、国民全体の社会的構造の中での、それぞれの階級の地位は、一方においてはそのような機能に課せられた重要性によって、他方においてはその階級がこの機能を遂行するさいの成功の度合いによって、きまってくる。」シュンペーター、前掲書『帝国主義と社会階級』p. 218 参照。
- (45) シュンペーター、同上書、pp. 224-27 参照。
- (46) 「自分で戦争を起こして勝利を収めることが、家の地位を高めるのに役立った。この方法によって地位を高めた家族はたくさんあったが、それとともに、戦争に破れて没落した家族もあった。……資力が乏しくて小さないさかいごとや侵略行為しかできないような最下級の貧乏騎士でも、……この仕方では地位を高めることができた。」シュンペーター、同上書、p. 188 参照。
- (47) 「階級的地位が強固にかためられていればいるほど、階級間の隔壁はそれだけ越えにくい、という事情は依然として続いた。それでもなおその隔壁は、十五世紀以後においても、それ以前におけると同様に、しばしば越えられたのである。……騎士階級自身は、十一世紀になっても、農民階級からの昇進者によって補充されていった。」シュンペーター、同上書、p. 206 参照。
- (48) 「貴族がみずから陣頭に立ってその威信を守ったのは、十六世紀の農民戦争のときが最後であった。……騎士の武勇は一種の観念的なものとなり、生存のための社会的闘争においては何の意味ももたず、撃剣用の刀をふりまわしたり、古典式の馬術をたしなむ高等技術になってしまった。……このことは、支配者としての貴族が実際にはもはや本来の意における貴族でなくなったということを意味するものであった。」シュンペーター、同上書、pp. 230-232 参照。
- (49) 「支配階級の相対的地位は、‘近代’の黎明期にさしかかるまで、次第に低下するどころか、かえって強化されていった。……この点にかんする唯一の例外は都市のブルジョアジーである。……都市ブルジョアジーは、封建社会の階層的な枠の中から生れでたのち、貴族階級の支配をのがれ、幾重にも固められた階級的法制をくぐりぬけて、みずからの機能に社会的重要性を付与していったのである。」シュンペーター、同上書、p. 223。
- (50) 「台頭しつつある資本主義は、……さらにその人材と手段をもつくり出した。封建的な社会環境を破壊し、荘園や村落の知的平和をかき乱し、とくに経済領域での自己の成果によって立つ新しい階級のための社会的活動舞台をつくり出すことによって、今度はその領域へ強い意志とすぐれた知能とをひきつけた。……企業者としての成功は、……大多数の最上の頭脳を引きつけ、かくてまたいっそうの成功を生み出すのに十分なほど魅力的であった。シュンペーター、前掲書『資本主義・社会主義・民主主義』pp. 194-195。
- (51) 「内外の政策も制度的変革も、ますますその発展に適応するごとく、かつそれを促進するがごとくに形成された。……その構造の鉄の骨組みは、なお封建社会の人的素材からなっており、この素材はなお前資本主義的類型に従って行動していた。こういう人が国家の役所を満たし、軍隊の幹部となり、政策を立案した。」シュンペーター、同上書、p. 213。
- (52) シュンペーター、同上書、p. 213。
- (53) シュンペーター、同上書、p. 214。
- (54) この思想について、イタリアの歴史哲学者のヴィーコとの関係を示したのが金指である。金指、同上書、p. 23 参照。ヴィーコ（1668～1744）は、啓蒙思想時代に発展的な歴史観を説き、人間社会の螺旋的進化および神話と想像力の重要性を力説した人物である。
- (55) シュンペーター、前掲書、『理論経済学の本質と主要内容』上巻、p. 5。
- (56) 「先人の業績はほとんど全く顧みることなく、とかく差異に拘泥して共通なものを忘れがちであり、改革にあたっては、できる限り寛容にはなく、できる限り破壊的にこれを遂行し、さらに現存するものの理解のある展開よりも、根本的な新建設を選ぶということは、社会科学が比較的若いせいであるかもしれない。」シュンペーター、同上書、p. 6。

57) 方法論争とは、1882-1883年を頂点とするオーストリア学派のメンガーと、歴史学派のシュモラーとの社会科学の分析方法をめぐる論争である。一般的には、メンガーが、社会現象の法則化の意義、理論の重要性を主張したのに対し、シュモラーは、社会現象において法則は問題となりえず、各々の時代は個別的に取り扱われるべきであると主張し、経済分析における歴史叙述と歴史的説明の細目研究の重要性を説いたと言われる。しかし、シュンペーターは、メンガーは、経済的問題に対する個別的事例の研究にとって歴史的基礎が必要であることを認めていたし、シュモラーも、社会科学的と自然科学の原理的な本質は同一であると認知していたのであり、当時の多くの理論家よりも先に進んでいたと主張し、自身、理論と歴史の統合を目指した。シュンペーター、前掲書『経済学史』第四章、第五節を参照。

58) シュンペーター、前掲書『理論経済学の本質と主要内容』上巻、p. 7。

59) シュンペーター、前掲書『資本主義・社会主義・民主主義』p. 319。

60) 八木紀一郎「ヒルファーディングとシュンペーター」、前掲書、『別冊経済セミナー「シュンペーター再発見」生誕100年記念』所収、p. 171。

61) シュンペーター、前掲書、『景気循環論』一卷、原著者序 p. 1。

62) 八木は、こうした考察から、シュンペーターの視点が、それが歴史的な変化を取扱っている場合であっても、ケインズやマルクスとは異なり、本来はミクロの個別的過程にあると結論している。八木紀一郎、『オーストリア経済思想史研究—中欧帝国と経済学者—』（名古屋大学出版会、1988年）pp. 146-147 参照。